

## 「呼ばれて名告る」

岐阜高山教区駐在教導 五辻 元

「おい、げんのじょう！」子どものころ祖父が時折、私をそう呼ぶことがありました。私の名前は「元」、「もと」または「はじめ」と書いて「げん」と読みます。ですので、「げんのじょう」と呼ばれても「えっ、誰のこと？」といった感じなのですが、こっちを見ながら呼んでいるので私のことなのでしょう。そんな呼び方をされることは他にはいないので、その響きを今でも思い出すことがあるのです。

ところで全く話は変わりますが、岐阜高山教区では教区改編後、「人（仏弟子）の誕生」という課題から帰敬式を教化の重点施策とすることが決まり、先日の「お待ち受け大会」において、その呼びかけがなされました。

11月には高山別院、12月には岐阜別院において報恩講が勤まり、その期間中に帰敬式が執行されますが、呼びかけに応じてくださってか、両別院では例年より多くの方が受式を申し込んでくださっているようです。

私自身これまで本山や別院などの帰敬式に立ち会わせていただきました。厳粛な雰囲気の中、どなたも緊張の面持ちで式に臨まれています法名をいただいて新たな歩み出しの一步を踏み出そうとされるご門徒さんの表情を拝見するとき、自分が本山の御影堂、真っ暗なお堂の中で得度を受け緊張していたことをふと思い出します。

今更ながら私も法名を名告るものだったことに気づかされるのです。

しかしながら、三宝に帰依することを誓って歩みだしたはずの今の私の生活

はどうなっているのでしょうか。仏・法・僧に帰依し、仏の本願を拠り所として暮らしているのでしょうか。「そうです」と胸を張って言えないばかりか、人に勝ちたいという「勝他」の心、世間の評判や名誉を求める「名聞」の心、利を貪る「利養」の心、この三つの髻を切ることも、見つめることもないまま、当たり前前に生活している私があります。

「釋元浄」、これが私の法名です。「げんのじょう！」とは私を法名で呼ぶ声だったのです。「三宝に帰依するものであれ、仏の願いに生きるものであれ」その呼び声にうなづき、「釋」の仏弟子を自ら名告って生きるものとなる。それが帰敬式を受けるもの、得度を受けるものに対する願いなのでしょう。